

エッセイ

“ホンモノのひとこと”こそ胸をうつ

井上 恭介

いのうえ きょうすけ NHK報道局報道番組センター
チーフ・プロデューサー（経済担当）。NHK経済羅針盤、
NHKスペシャル、クローズアップ現代を担当。難しい話を
いかに人の動きで見せるか、世の中の動きとして感じても
らうかに取り組んでいる。

考えてみれば、テレビ、中でもドキュメンタリー制作に携わる者ほど、言葉を操るにあたって「余計なことをするな」と自らに言いよかせる人はいないのではないかと、そう思います。優れた題材、優れた取材、優れた撮影であればある程、あと付けのナレーションなどいらないうです。主人公の表情、話、静かに震える声。相手の顔、涙、遠くの夕日、二人の長い影。ナレーションはひとこと「二人は朝まで一睡もせず話し込みました」でいい。見てわからないことだけ、ちよつと添える。それでいいのです。

ところが最近のテレビは、しばしばそれを許してくれません。「わかりやすく」の名のもとに、隙間にナレーションを詰め込む。主人公の話すことを字幕で補強する。あぐく画面の右上の角に「離ればなれの親子、感動の再会！」の文字。こうすればチャンネルを変える途中で人が目にとめ、結果視聴率が上がるのだそうです。懐古趣味で「昔は良かった」とかいうつもりは全くありませんが、「言葉の大安売り」にほとほと嫌気がさす毎日です。

そんな私がいつも胸の奥にしまい、たまに取り出して反芻しているのが、中学二年国語の教科書にも取り上げてもらった「被爆の伝言」です。広島に原爆が落とされた直後、救護所となった小学校の壁に、家族や教え子を探すために書かれた伝言。「お願い知ラセ下サイ」とだけ書

かれた一行。半世紀もたつて見つかった「ほんの数字」が、何百何千の言葉よりも雄弁に親や兄弟、先生の思いを語る。もちろん「数字」を「言葉」として読ませるには説明が必要なのですが、一旦わかっってしまうと導入役を果たした説明の言葉はむしろ邪魔で、「お願い知ラセ下サイ」だけの方がはるかに伝える力を持つ。不思議です。

ドキュメンタリー番組の制作者として被爆の伝言の発見に関わった私が、その後いきさつを本にまとめたのは、言葉が伝わる力に驚き、少しでもこの言葉が世の中に広がればという思いからでした。

実は、私の想像を遙かに超える形で、言葉は広がっています。

この本をもって旅行に出た被爆者がスウェーデンの友人に一冊あげた。本はめぐりめぐってスウェーデンの本屋の棚に。9・11同時多発テロのあと、音楽家として平和のために何かできないかと悩んでいたマリンバ奏者がたまたまその本を手に取り、勇気をもらった。今、本の主人公のひとりでもあるこの被爆者村上啓子さんとマリンバ奏者古徳景子さんは共に手を携え、日本各地の小学校、中学校をまわり、平和コンサートを開いています。

古徳景子さんが作曲した「お願い」という曲と共に、言葉は広がり続けています。

*教科書学習材名「壁に残された伝言」